

映画「火垂るの墓」と東京大空襲

八子 和男 87 歳

ジブリ映画「火垂るの墓」が世界各地でネット配信され、見た人の間で直視できないほどの辛い現実が描かれており、見るのが辛い」という反響を呼んでいる。

私は大分前に小説家、野坂昭如^{の さ か あきゆき}のこの原作を読み、あの時の戦争のあまりの悲惨さと幼い兄弟を襲った悲劇にショックを受け、二度と読むまいと決めてその本を処分した。それから暫くしてスタジオ・ジブリがこの小説をアニメ化し、公開した。

私はアニメ映画が大好きでジブリ作品はすべて見ているが、「火垂るの墓」だけは避けてきた。しかし、娘からテレビ放映されるので録画して欲しいと頼まれたのを機会に見る決意をしたが、案の定と言おうか、見始めて 15 分位で見るのをやめた。それは神戸の町が敵機の焼夷弾に焼き尽くされたシーンである。命からがらに逃げた幼い兄妹はこの時は助かったが、後始末のために家に残った母親は命を落とした。(しかしこの兄妹も後に無残な死を迎えた。)

私は、東京浅草で生まれ 4 歳まで暮らしたが、迫ってきた戦火を避けるため、母の生家がある神奈川県愛甲郡中津村(現愛甲郡愛川町中津)に疎開した。母、兄、妹と私 4 人が疎開し、父、父の両親、父の妹の 4 人が浅草に残った。ある夜のこと。母の生家の座敷で眠っていた私は母親に起こされ、母屋の裏側に回って驚いた。数人の大人たちが真っ赤に光る東北の空を見ている。遥か五十数キロ離れた東京が空襲を受け燃えさかっている遠景がくっきりと見えた。

数日して、浅草の家は焼けたが一家 4 人は無事であることを母親から聞いて知った。やかんに水を入れ、それを抱えて逃げ惑った話は、怖かったけど少しだけおかしかった。ペットボトルもプラタンクもないその頃、やかんはベストチョイスであったのだ。その後、父親も他の 3 人もその時の話をしなかった。しかし私はあの夜の光景を忘れることはできない。

それから数十年後、私の両親は他界し、東京上野で父親の法事が執り行われ、父の妹(叔母)が出席してくれたので、私たちの同世代の兄妹、従姉たちがこの年老いた叔母をとり囲んで、戦災に会ったときの話を聞かせて欲しいと頼んだ。この機会に聞いておかなければもう確認できないと思ったのだ。叔母自身死ぬような思いをしたに違いないし、地獄のような情景を目にしながら走ったと思うが、遥か彼方の記憶のためか、そのことには触れず、ただ淡々とやかんを抱えて走ったのは本当であったこと、家の近くに隅田

川が流れているので、その橋の下に逃げ込んだことなどを話してくれた。私の家は浅草寺雷門とJR蔵前駅の間にあったから、その橋は蔵前橋か^{うまや}厩橋であったであろう。橋の下は落ちてくる焼夷弾を避けることができ、近くに家屋がないから火災も避けることができるのだから、賢明な判断であったと思う。もっとも、関東大震災のときは隅田河畔に逃げ込んだ人たちの多くが川に入り溺死したらしいし、また浅草区(今の台東区)や江東区はこの空襲のど真ん中に位置していた。昭和 20 年 3 月の大空襲で 10 万人の東京市民が死んだと後で聞き、よくも父親たち 4 人は生還できたとあらためて思った。奇跡だったのでは、とも思えてくる。

そんなことを思い出してしまうため、私の「火垂るの墓」鑑賞はストップしたままである。私の家族に起こった出来事は幸いなことに無事に終わったが、同じように戦火に焼かれ、還れなかった人が世界には大勢いる。戦争は少しの火種で燃え広がり、消すのにはとてつもなく大きな力がある。今もどこかで同じことが繰り返されている。あの夜東北の空を真っ赤に染めた遠い炎を、私は忘れられない。だから私は、この映画を最後まで見ることができない。